

にはご安心下さい。時折園場を訪ねて、変身した元気な皆さんの姿を見せて上げて下さい。

## 環境科学研究科

### 環境動態学専攻の一年

伴 修平

環境動態学専攻長

2012年度は、環境動態学専攻において、カリキュラムや履修に係る変更点がほとんどなく、それが故に、私のような新前専攻長でも何とかやってこられたのかもしれませんが。構成員の皆様の優しく、寛大なご支援に感謝するしだいです。しかし、来年度はルーブリックの作成など大きな変革が待ち構えています。更なるご協力をお願いしなければなりません。

さて、昨年度来、本専攻における学生の出入りはとても順調です。特に博士の学位取得者が増加傾向なのは大変喜ばしいかぎりです。本年度修了者は博士前期課程で19名、博士後期課程で4名でした。特に、博士後期課程を修了した4名全員が課程内の学位取得であったことはとても良い前例となりました。後進にとっても大変良いお手本になったことでしょう。さらに、これとは別途、2件の論文博士が授与され、合計6名の博士（環境科学）が誕生いたしました。環境科学分野での研究推進に大きく寄与することを期待したいと思います。一方、来年度の本専攻への進学者は、博士前期過程に24名、博士後期課程に5名と、いずれも定員を大きく上回りました。

教員にも若干の入れ替わりがありました。昨年10月には新任の田辺（細井）助教を迎えることができました。一方、この3月には長谷川、金木両教授を送り出すことになりました。ベテランを失うことは残念ですが、常なる新陳代謝こそが健全なシステムを形作るの、生物個体から生態系、そして大学の組織まで共通のセオリーに違いありません。

ところで、環境科学を推進する上で学際的な共同研究を行うことはとても大切です。しかし、これまでに本学で卓越した共同研究を行っているグループはそれほど多くありませんでした。そこで、本年度から拠点研究を設定することによって、これを中核とした研究体制を充実させてゆくことになりました。本専攻の教員が中心となって推進するのは、4つの拠点研究のうちの一つ「琵琶湖モデル構築に関する研究」です。私と須戸教授そして若干の若手教

員で以下の3つの研究課題を考えました：1) 琵琶湖から得られる持続可能な資源を利用した環境保全と里湖循環型社会の構築（研究代表者、伴 修平）、2) 琵琶湖への大気由来降水物のフラックスと湖沼生態系への影響評価（研究代表者、永淵 修）、3) 温暖化時代に対応した次世代型琵琶湖環境モニタリングシステムの構築（研究代表者、後藤直成）。少しでも関連する分野の方は積極的に参加して頂けることを希望します。また、異なる分野からの参加も大歓迎です。もちろん、皆様におかれましては、これらに限らず自らの研究活動を続けておられることと思いますが、これらを核として良い共同研究が始まることを期待いたします。

### 環境計画学専攻のこの一年

水原 涉

環境計画学専攻長

この1年3ヶ月間に限ってみると、本専攻では、特に大きな動きや問題はなかったと言えるだろう。ただ、幾つかの議論が上位機関から投げかけられており、今後、検討を進めていく必要があるテーマのうち、秋入学について触れておきたい。

大学を巡って少し議論になっている秋入学について本学大学院でも検討開始の動きが現れた。これは今年の学長の新年挨拶の中でも触れられており、国際化の中で内外双方向の学生、大学研究者の受入などの時期的利便性を考えてのことであるが、まずは大学院から検討して欲しいというものである。検討の結果は次期中期計画に反映されることになるのだろう。

隣国では韓国が春入学を実施している。中国は、過去に一気に小学校から大学まで秋入学に転換したようだ。ヨーロッパは昔から各教育段階で秋入学を採用している。秋入学に転換するのであれば、本来は、高校までの各段階でも実施すべきだ。そんな動きのない（あるいはそれが不可能な？）日本で、大学院だけで秋入学を取り込むことは並立制にならざるをえない。本専攻内でも入試や演習・研究といった授業の複雑化と教職員の負担増に結びつくが、それだけのメリットがあるのかなどの疑問点が出されている。

以下に、本専攻大学院学生の状況について、触れておく。

H24年度入学者は当専攻で前期課程22名（うち環境意匠研究部門では17名、環境地域経営では5